

## 「環境負荷低減事業活動実施計画」取組事例一覧

類型1	a 有機質資材の施用による土づくり及び化学肥料・化学農薬の使用減少 b 温室効果ガスの排出の量の削減 c 土壌を使用しない栽培技術の実施及び化学肥料・化学農薬の使用減少 d 家畜のふん尿に含まれる窒素、磷その他の環境への負荷の原因となる物質の量の減少 e 飼料の投与等により流出する窒素、磷その他の環境への負荷の原因となる物質の量の減少 f 土壌炭素貯留に資する土壌改良資材の農地又は採草放牧地への施用 g 生分解性プラスチック資材の使用その他の取組によるプラスチックの排出若しくは流出の抑制又は化石資源由来のプラスチックの使用量削減 h 化学肥料・化学農薬の使用減少と併せて行う生物多様性の保全
-----	---

類型2	1 有機質資材の施用に関する取組 2 化学肥料の施用減少に関する取組 3 化学農薬の使用減少に関する取組
-----	--

区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
共通	共通	a		土づくりを行いながら日本農林規格等に関する法律に基づく有機農産物についての生産工程管理者の認証申請書に基づく栽培計画に取り組む	有機JAS認証を受けていること
共通	共通	a		土づくりを行いながら青森県特別栽培農産物生産流通計画承認申請書に基づく栽培管理計画に取り組む	計画承認を受けていること
1	水稲	水稲(全域)	a	1 完熟たい肥10a当たり1tを基本として施用する	
2	水稲	水稲(全域)	a	1 稲わらを秋起こしですき込む	
3	水稲	水稲(全域)	a	1 輪作で前作が小麦の場合は、麦わらのすき込みを行う	
4	水稲	水稲(全域)	a	2 側条施肥による局所施肥を施用する	
5	水稲	水稲(全域)	a	2 被覆肥料など肥効調節型肥料を施用する	
6	水稲	水稲(全域)	a	2 施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
7	水稲	水稲(全域)	a	2 完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
8	水稲	水稲(全域)	a	2 計画的なブロックローテーションを行い、水稲の減肥を行う	
9	水稲	水稲(全域)	a	3 温湯種子消毒により化学合成農薬を減らす	
10	水稲	水稲(全域)	a	3 機械除草により化学合成農薬を減らす	
11	水稲	水稲(全域)	a	3 除草用動物利用により化学合成農薬を減らす	アイガモなど
12	水稲	水稲(全域)	a	3 生物農薬による種子消毒により化学合成農薬を減らす	
13	水稲	水稲(全域)	a	3 抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
14	水稲	水稲(全域)	a	3 マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	米ぬか、紙マルチ
15	水稲	水稲(全域)	b	水管理システムを導入する	
16	水稲	水稲(全域)	b	農業機械の省エネルギー化の取組を行う	
17	水稲	水稲(全域)	b	自動操舵装置を備えたトラクターの利用により、燃料使用量を削減	「農業機械の省エネ利用マニュアル 平成27年度版」に基づき実践
18	水稲	水稲(全域)	c	収量コンバインと可変施肥農機により化学肥料を削減する	
19	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	1 完熟たい肥10a当たり0.5～1tを基本として施用する	
20	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	2 側条施肥による局所施肥を施用する	
21	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	2 施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
22	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	2 完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
23	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	2 計画的なブロックローテーションを行い、水稲の減肥を行う	
24	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	3 温湯種子消毒により化学合成農薬を減らす	
25	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	3 機械除草により化学合成農薬を減らす	
26	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	3 除草用動物利用により化学合成農薬を減らす	アイガモなど
27	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	3 生物農薬による種子消毒により化学合成農薬を減らす	
28	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	3 抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
29	水稲	水稲(山間冷涼地帯・海岸冷涼地帯・下北外海地帯)	a	3 マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	米ぬか、紙マルチ
30	畑作	小麦	a	1 完熟たい肥10a当たり1tを基本として施用する	
31	畑作	小麦	a	1 収穫後に麦わらのすき込みを行う	
32	畑作	小麦	a	1 緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
33	畑作	小麦	a	1 輪作で前作が水稲の場合は、稲わらのすき込みを行う	
34	畑作	小麦	a	2 基肥を畦施用とする	
35	畑作	小麦	a	2 肥効調節型肥料を施用する	
36	畑作	小麦	a	2 施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
37	畑作	小麦	a	2 完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
38	畑作	小麦	a	3 温湯種子消毒により化学合成農薬を減らす	

	区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
39	畑作	小麦	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	耕起直後は種等
40	畑作	小麦	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
41	畑作	小麦	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
42	畑作	だいず	a	1	完熟たい肥10a当たり1tを基本として施用する	
43	畑作	だいず	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
44	畑作	だいず	a	1	輪作で前作が水稻又は小麦の場合は、稲わら又は麦わらのすき込みを行う	
45	畑作	だいず	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
46	畑作	だいず	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
47	畑作	だいず	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
48	畑作	だいず	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
49	畑作	だいず	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
50	畑作	だいず	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	ハスモンキラー
51	畑作	だいず	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	クリムソクローバ、クロタリア
52	畑作	だいず	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
53	畑作	だいず	a	3	マルチ栽培により農薬を減らす	麦のリピングマルチ等
54	畑作	あずき	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
55	畑作	あずき	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
56	畑作	あずき	a	2	基肥を畦施用する	
57	畑作	あずき	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
58	畑作	あずき	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
59	畑作	あずき	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
60	畑作	あずき	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
61	畑作	そば	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
62	畑作	そば	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
63	畑作	そば	a	2	基肥を畦施用する	
64	畑作	そば	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
65	畑作	そば	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
66	畑作	そば	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
67	畑作	そば	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
68	畑作	そば	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
69	畑作	なたね	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
70	畑作	なたね	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
71	畑作	なたね	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
72	畑作	なたね	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
73	畑作	なたね	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
74	畑作	なたね	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
75	畑作	はとむぎ	a	1	完熟たい肥10a当たり1tを基本として施用する	
76	畑作	はとむぎ	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
77	畑作	はとむぎ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
78	畑作	はとむぎ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
79	畑作	はとむぎ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
80	畑作	はとむぎ	a	3	温湯種子消毒により化学合成農薬を減らす	
81	畑作	はとむぎ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
82	畑作	アメリカホドイモ	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
83	畑作	アメリカホドイモ	a	2	基肥を畦施用する	
84	畑作	アメリカホドイモ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
85	畑作	アメリカホドイモ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
86	畑作	アメリカホドイモ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
87	畑作	アメリカホドイモ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
88	畑作	アメリカホドイモ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
89	畑作	畑作(全般)	b		自動操舵装置を備えたトラクターの利用により、燃料使用量を削減	「農業機械の省エネ利用マニュアル 平成27年度版」に基づき実践
90	畑作	畑作(全般)	c		収量コンバインと可変施肥農機により化学肥料を削減する	
91	工芸	葉たばこ	a	1	完熟たい肥10a当たり1.5tを基本として施用する	
92	工芸	葉たばこ	a	1	休作期間にライムギなどの緑肥を作付けし、すき込みを行う	
93	工芸	葉たばこ	a	2	基肥を作条に中層条肥する	
94	工芸	葉たばこ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
95	工芸	葉たばこ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
96	工芸	葉たばこ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
97	工芸	葉たばこ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
98	野菜	だいこん	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
99	野菜	だいこん	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
100	野菜	だいこん	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
101	野菜	だいこん	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
102	野菜	だいこん	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
103	野菜	だいこん	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
104	野菜	だいこん	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
105	野菜	だいこん	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
106	野菜	だいこん	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
107	野菜	だいこん	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
108	野菜	だいこん	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
109	野菜	だいこん	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
110	野菜	だいこん	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	トンネル栽培、べたがけ栽培等
111	野菜	だいこん	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	
112	野菜	だいこん	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
113	野菜	ばれいしょ	a	1	完熟たい肥10a当たり1.5tを基本として施用する	
114	野菜	ばれいしょ	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
115	野菜	ばれいしょ	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
116	野菜	ばれいしょ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
117	野菜	ばれいしょ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
118	野菜	ばれいしょ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	

	区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
119	野菜	ばれいしよ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	普通栽培
120	野菜	ばれいしよ	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
121	野菜	ばれいしよ	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
122	野菜	ばれいしよ	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
123	野菜	ばれいしよ	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	
124	野菜	ばれいしよ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
125	野菜	にんじん	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
126	野菜	にんじん	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
127	野菜	にんじん	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
128	野菜	にんじん	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
129	野菜	にんじん	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
130	野菜	にんじん	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
131	野菜	にんじん	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
132	野菜	にんじん	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
133	野菜	にんじん	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
134	野菜	にんじん	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	トンネル栽培、べたがけ栽培等
135	野菜	にんじん	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	
136	野菜	にんじん	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
137	野菜	ごぼう	a	1	完熟たい肥10a当たり1.5tを基本として施用する	
138	野菜	ごぼう	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
139	野菜	ごぼう	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
140	野菜	ごぼう	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
141	野菜	ごぼう	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
142	野菜	ごぼう	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
143	野菜	ごぼう	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
144	野菜	ごぼう	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
145	野菜	ごぼう	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	
146	野菜	ごぼう	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
147	野菜	かぶ	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
148	野菜	かぶ	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
149	野菜	かぶ	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
150	野菜	かぶ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
151	野菜	かぶ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
152	野菜	かぶ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
153	野菜	かぶ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
154	野菜	かぶ	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
155	野菜	かぶ	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
156	野菜	かぶ	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
157	野菜	かぶ	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
158	野菜	かぶ	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
159	野菜	かぶ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	べたがけ栽培等
160	野菜	かぶ	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	コナガコン等
161	野菜	かぶ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
162	野菜	ながいも・やまといも	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
163	野菜	ながいも・やまといも	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
164	野菜	ながいも・やまといも	a	2	萌芽期施肥及び追肥を側条に行う	
165	野菜	ながいも・やまといも	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
166	野菜	ながいも・やまといも	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
167	野菜	ながいも・やまといも	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
168	野菜	ながいも・やまといも	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
169	野菜	ながいも・やまといも	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
170	野菜	ながいも・やまといも	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
171	野菜	ながいも・やまといも	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	
172	野菜	ながいも・やまといも	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
173	野菜	にんにく	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
174	野菜	にんにく	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
175	野菜	にんにく	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
176	野菜	にんにく	a	2	基肥を畦施用する	
177	野菜	にんにく	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
178	野菜	にんにく	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
179	野菜	にんにく	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
180	野菜	にんにく	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
181	野菜	にんにく	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
182	野菜	にんにく	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
183	野菜	にんにく	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
184	野菜	キャベツ	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
185	野菜	キャベツ	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
186	野菜	キャベツ	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
187	野菜	キャベツ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
188	野菜	キャベツ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
189	野菜	キャベツ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
190	野菜	キャベツ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
191	野菜	キャベツ	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
192	野菜	キャベツ	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
193	野菜	キャベツ	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
194	野菜	キャベツ	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
195	野菜	キャベツ	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
196	野菜	キャベツ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	トンネル栽培等
197	野菜	キャベツ	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	交信攪乱剤
198	野菜	キャベツ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
199	野菜	はくさい	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	

	区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
200	野菜	はくさい	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
201	野菜	はくさい	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
202	野菜	はくさい	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
203	野菜	はくさい	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
204	野菜	はくさい	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
205	野菜	はくさい	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
206	野菜	はくさい	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
207	野菜	はくさい	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
208	野菜	はくさい	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
209	野菜	はくさい	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
210	野菜	はくさい	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
211	野菜	はくさい	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	トンネル栽培等
212	野菜	はくさい	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	交信攪乱剤
213	野菜	はくさい	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
214	野菜	ねぎ	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
215	野菜	ねぎ	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
216	野菜	ねぎ	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
217	野菜	ねぎ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
218	野菜	ねぎ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
219	野菜	ねぎ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
220	野菜	ねぎ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
221	野菜	ねぎ	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
222	野菜	ねぎ	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
223	野菜	ねぎ	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
224	野菜	ねぎ	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	太陽熱、熱水・蒸気
225	野菜	ねぎ	a	3	光利用技術(UVカットフィルム)により化学合成農薬を減らす	
226	野菜	ねぎ	a	3	光利用技術(ハウス栽培での光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
227	野菜	ねぎ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
228	野菜	ねぎ	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
229	野菜	レタス	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
230	野菜	レタス	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
231	野菜	レタス	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
232	野菜	レタス	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
233	野菜	レタス	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
234	野菜	レタス	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
235	野菜	レタス	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
236	野菜	レタス	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
237	野菜	レタス	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
238	野菜	レタス	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
239	野菜	レタス	a	3	フェロモン剤を利用し化学合成農薬を減らす	露地栽培
240	野菜	レタス	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
241	野菜	ほうれんそう	a	1	完熟たい肥10a当たり2.5tを基本として施用する	
242	野菜	ほうれんそう	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
243	野菜	ほうれんそう	a	2	基肥を畦施用する	
244	野菜	ほうれんそう	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
245	野菜	ほうれんそう	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
246	野菜	ほうれんそう	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
247	野菜	ほうれんそう	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
248	野菜	ほうれんそう	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
249	野菜	ほうれんそう	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
250	野菜	ほうれんそう	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	太陽熱、熱水・蒸気
251	野菜	ほうれんそう	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
252	野菜	ほうれんそう	a	3	光利用技術(UVカットフィルム)により化学合成農薬を減らす	
253	野菜	ほうれんそう	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
254	野菜	ほうれんそう	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
255	野菜	ほうれんそう	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
256	野菜	ほうれんそう	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
257	野菜	しゅんぎく	a	1	完熟たい肥10a当たり3tを基本として施用する	
258	野菜	しゅんぎく	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
259	野菜	しゅんぎく	a	2	基肥を畦施用する	
260	野菜	しゅんぎく	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
261	野菜	しゅんぎく	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
262	野菜	しゅんぎく	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
263	野菜	しゅんぎく	a	3	生物農薬を利用し化学合成農薬を減らす	微生物剤等
264	野菜	しゅんぎく	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
265	野菜	しゅんぎく	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
266	野菜	しゅんぎく	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
267	野菜	しゅんぎく	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
268	野菜	しゅんぎく	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
269	野菜	ブロッコリー	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
270	野菜	ブロッコリー	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
271	野菜	ブロッコリー	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
272	野菜	ブロッコリー	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
273	野菜	ブロッコリー	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
274	野菜	ブロッコリー	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
275	野菜	ブロッコリー	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
276	野菜	ブロッコリー	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
277	野菜	ブロッコリー	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
278	野菜	ブロッコリー	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
279	野菜	ブロッコリー	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
280	野菜	ブロッコリー	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	

	区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
281	野菜	ブロッコリー	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
282	野菜	ブロッコリー	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
283	野菜	スイートコーン	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
284	野菜	スイートコーン	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
285	野菜	スイートコーン	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
286	野菜	スイートコーン	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
287	野菜	スイートコーン	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
288	野菜	スイートコーン	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
289	野菜	スイートコーン	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
290	野菜	スイートコーン	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
291	野菜	スイートコーン	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
292	野菜	スイートコーン	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
293	野菜	スイートコーン	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
294	野菜	アスパラガス	a	1	完熟たい肥10a当たり4～5tを基本として施用する	
295	野菜	アスパラガス	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
296	野菜	アスパラガス	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
297	野菜	アスパラガス	a	2	点滴かん水同時施肥を行う	
298	野菜	アスパラガス	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
299	野菜	アスパラガス	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
300	野菜	アスパラガス	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
301	野菜	アスパラガス	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
302	野菜	アスパラガス	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
303	野菜	アスパラガス	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
304	野菜	アスパラガス	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
305	野菜	アスパラガス	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
306	野菜	ずいか	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
307	野菜	ずいか	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
308	野菜	ずいか	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
309	野菜	ずいか	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
310	野菜	ずいか	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
311	野菜	ずいか	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
312	野菜	ずいか	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
313	野菜	ずいか	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
314	野菜	ずいか	a	3	抵抗性品種・台木を利用し、化学合成農薬を減らす	
315	野菜	ずいか	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
316	野菜	ずいか	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
317	野菜	ずいか	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	雨よけ栽培、ハウス栽培等
318	野菜	ずいか	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
319	野菜	ずいか	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
320	野菜	メロン	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
321	野菜	メロン	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
322	野菜	メロン	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
323	野菜	メロン	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
324	野菜	メロン	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
325	野菜	メロン	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
326	野菜	メロン	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
327	野菜	メロン	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	天敵・微生物剤等
328	野菜	メロン	a	3	抵抗性品種・台木を利用し、化学合成農薬を減らす	
329	野菜	メロン	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
330	野菜	メロン	a	3	土壌還元消毒により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培等
331	野菜	メロン	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
332	野菜	メロン	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	雨よけ栽培、ハウス栽培等
333	野菜	メロン	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
334	野菜	メロン	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
335	野菜	トマト・ミニトマト	a	1	完熟たい肥10a当たり2～3tを基本として施用する	
336	野菜	トマト・ミニトマト	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
337	野菜	トマト・ミニトマト	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
338	野菜	トマト・ミニトマト	a	2	点滴かん水同時施肥を行う	
339	野菜	トマト・ミニトマト	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
340	野菜	トマト・ミニトマト	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
341	野菜	トマト・ミニトマト	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
342	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
343	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	天敵・微生物剤等
344	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
345	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	抵抗性品種・台木を利用し、化学合成農薬を減らす	
346	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
347	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	土壌還元消毒により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培等
348	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	太陽熱、熱水、蒸気
349	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	光利用技術(非散布型農薬含有テープ)により化学合成農薬を減らす	
350	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	光利用技術(黄色灯)により化学合成農薬を減らす	
351	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	光利用技術(粘着資材)により化学合成農薬を減らす	
352	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
353	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	光利用技術(UVカットフィルム材)により化学合成農薬を減らす	
354	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
355	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
356	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
357	野菜	トマト・ミニトマト	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
358	野菜	トマト・ミニトマト	b		ヒートポンプや木質バイオマス暖房機の導入等による再生可能エネルギーを利用する	ハウス栽培等
359	野菜	トマト・ミニトマト	b		内張、外張の多層化や、保温性の高い被覆資材の利用によりエネルギー使用量を削減する	ハウス栽培等

	区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
360	野菜	トマト・ミニトマト		b	温度ムラの改善や変温管理の実施など、作物の局所加温技術を導入する	ハウス栽培等
361	野菜	きゅうり	a	1	完熟たい肥10a当たり3～4tを基本として施用する	
362	野菜	きゅうり	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
363	野菜	きゅうり	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
364	野菜	きゅうり	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
365	野菜	きゅうり	a	2	点滴かん水同時施肥を行う	
366	野菜	きゅうり	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
367	野菜	きゅうり	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
368	野菜	きゅうり	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
369	野菜	きゅうり	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	天敵・微生物剤等
370	野菜	きゅうり	a	3	抵抗性品種・台木を利用し、化学合成農薬を減らす	
371	野菜	きゅうり	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	太陽熱
372	野菜	きゅうり	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
373	野菜	きゅうり	a	3	光利用技術(非散布型農薬含有テープ)により化学合成農薬を減らす	
374	野菜	きゅうり	a	3	光利用技術(粘着資材)により化学合成農薬を減らす	
375	野菜	きゅうり	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
376	野菜	きゅうり	a	3	光利用技術(UVカットフィルム材)により化学合成農薬を減らす	
377	野菜	きゅうり	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
378	野菜	きゅうり	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
379	野菜	きゅうり	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
380	野菜	なす	a	1	完熟たい肥10a当たり2～4tを基本として施用する	
381	野菜	なす	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
382	野菜	なす	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
383	野菜	なす	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
384	野菜	なす	a	2	点滴かん水同時施肥を行う	
385	野菜	なす	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
386	野菜	なす	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
387	野菜	なす	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
388	野菜	なす	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	天敵・微生物剤等
389	野菜	なす	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
390	野菜	なす	a	3	抵抗性品種・台木を利用し、化学合成農薬を減らす	
391	野菜	なす	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
392	野菜	なす	a	3	光利用技術(非散布型農薬含有テープ)により化学合成農薬を減らす	
393	野菜	なす	a	3	光利用技術(黄色灯)により化学合成農薬を減らす	
394	野菜	なす	a	3	光利用技術(粘着資材)により化学合成農薬を減らす	
395	野菜	なす	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
396	野菜	なす	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
397	野菜	なす	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
398	野菜	なす	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
399	野菜	かぼちゃ	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
400	野菜	かぼちゃ	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
401	野菜	かぼちゃ	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
402	野菜	かぼちゃ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
403	野菜	かぼちゃ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
404	野菜	かぼちゃ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
405	野菜	かぼちゃ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
406	野菜	かぼちゃ	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
407	野菜	かぼちゃ	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
408	野菜	かぼちゃ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
409	野菜	いちご	a	1	完熟たい肥10a当たり4～5tを基本として施用する	
410	野菜	いちご	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
411	野菜	いちご	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
412	野菜	いちご	a	2	点滴かん水同時施肥を行う	
413	野菜	いちご	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
414	野菜	いちご	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
415	野菜	いちご	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
416	野菜	いちご	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	天敵・微生物剤等
417	野菜	いちご	a	3	抵抗性品種・台木を利用し、化学合成農薬を減らす	
418	野菜	いちご	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
419	野菜	いちご	a	3	土壌還元消毒により化学合成農薬を減らす	
420	野菜	いちご	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	太陽熱、熱水・蒸気
421	野菜	いちご	a	3	光利用技術(非散布型農薬含有テープ)により化学合成農薬を減らす	
422	野菜	いちご	a	3	光利用技術(粘着資材)により化学合成農薬を減らす	
423	野菜	いちご	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
424	野菜	いちご	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
425	野菜	いちご	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
426	野菜	いちご	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
427	野菜	いちご	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
428	野菜	いちご		b	ヒートポンプや木質バイオマス暖房機の導入等による再生可能エネルギーを利用する	ハウス栽培等
429	野菜	いちご		b	内張、外張の多層化や、保温性の高い被覆資材の利用によりエネルギー使用量を削減する	ハウス栽培等
430	野菜	いちご		b	温度ムラの改善や変温管理の実施など、作物の局所加温技術を導入する	ハウス栽培等
431	野菜	ピーマン	a	1	完熟たい肥10a当たり2～4tを基本として施用する	
432	野菜	ピーマン	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
433	野菜	ピーマン	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
434	野菜	ピーマン	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
435	野菜	ピーマン	a	2	点滴かん水同時施肥を行う	
436	野菜	ピーマン	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
437	野菜	ピーマン	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
438	野菜	ピーマン	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	

	区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
439	野菜	ピーマン	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	天敵・微生物剤等
440	野菜	ピーマン	a	3	抵抗性品種・台木を利用し、化学合成農薬を減らす	
441	野菜	ピーマン	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
442	野菜	ピーマン	a	3	光利用技術(非散布型農薬含有テープ)により化学合成農薬を減らす	
443	野菜	ピーマン	a	3	光利用技術(黄色灯)により化学合成農薬を減らす	
444	野菜	ピーマン	a	3	光利用技術(粘着資材)により化学合成農薬を減らす	
445	野菜	ピーマン	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
446	野菜	ピーマン	a	3	光利用技術(UVカットフィルム)により化学合成農薬を減らす	
447	野菜	ピーマン	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
448	野菜	ピーマン	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
449	野菜	ピーマン	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
450	野菜	えだまめ	a	1	完熟たい肥10a当たり1tを基本として施用する	
451	野菜	えだまめ	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
452	野菜	えだまめ	a	2	基肥を畦施用する	
453	野菜	えだまめ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
454	野菜	えだまめ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
455	野菜	えだまめ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
456	野菜	えだまめ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
457	野菜	えだまめ	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	クローラリア等
458	野菜	えだまめ	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
459	野菜	えだまめ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	不織布トンネル栽培等
460	野菜	えだまめ	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
461	野菜	えだまめ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
462	野菜	さやえんどう	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
463	野菜	さやえんどう	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
464	野菜	さやえんどう	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
465	野菜	さやえんどう	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
466	野菜	さやえんどう	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
467	野菜	さやえんどう	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
468	野菜	さやえんどう	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
469	野菜	さやえんどう	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
470	野菜	さやえんどう	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
471	野菜	さやえんどう	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	太陽熱
472	野菜	さやえんどう	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
473	野菜	さやえんどう	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
474	野菜	さやえんどう	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
475	野菜	さやえんどう	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
476	野菜	さやえんどう	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
477	野菜	さやいんげん	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
478	野菜	さやいんげん	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
479	野菜	さやいんげん	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
480	野菜	さやいんげん	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
481	野菜	さやいんげん	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
482	野菜	さやいんげん	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
483	野菜	さやいんげん	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
484	野菜	さやいんげん	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
485	野菜	さやいんげん	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
486	野菜	さやいんげん	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
487	野菜	さやいんげん	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
488	野菜	さやいんげん	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
489	野菜	さやいんげん	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
490	野菜	こまつな	a	1	完熟たい肥10a当たり2~3tを基本として施用する	
491	野菜	こまつな	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
492	野菜	こまつな	a	2	基肥を畦施用する	
493	野菜	こまつな	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
494	野菜	こまつな	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
495	野菜	こまつな	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
496	野菜	こまつな	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
497	野菜	こまつな	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
498	野菜	こまつな	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
499	野菜	こまつな	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
500	野菜	こまつな	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
501	野菜	こまつな	a	3	光利用技術(UVカットフィルム)により化学合成農薬を減らす	
502	野菜	こまつな	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
503	野菜	こまつな	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
504	野菜	こまつな	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	
505	野菜	こまつな	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
506	野菜	チンゲンサイ	a	1	完熟たい肥10a当たり2~3tを基本として施用する	
507	野菜	チンゲンサイ	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
508	野菜	チンゲンサイ	a	2	基肥を畦施用する	
509	野菜	チンゲンサイ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
510	野菜	チンゲンサイ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
511	野菜	チンゲンサイ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
512	野菜	チンゲンサイ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
513	野菜	チンゲンサイ	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
514	野菜	チンゲンサイ	a	3	対抗植物を利用し、化学合成農薬を減らす	マリーゴールド、ハイオーツ等
515	野菜	チンゲンサイ	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
516	野菜	チンゲンサイ	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
517	野菜	チンゲンサイ	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
518	野菜	チンゲンサイ	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
519	野菜	チンゲンサイ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等

	区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
520	野菜	チンゲンサイ	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	
521	野菜	チンゲンサイ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
522	野菜	そらまめ	a	1	完熟たい肥10a当たり3tを基本として施用する	
523	野菜	そらまめ	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
524	野菜	そらまめ	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
525	野菜	そらまめ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
526	野菜	そらまめ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
527	野菜	そらまめ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
528	野菜	そらまめ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
529	野菜	そらまめ	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
530	野菜	そらまめ	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
531	野菜	そらまめ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
532	野菜	そらまめ	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
533	野菜	そらまめ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
534	野菜	食用ぎく	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
535	野菜	食用ぎく	a	1	緑肥作物を導入した合理的な輪作体系を組む	
536	野菜	食用ぎく	a	2	基肥を畦施用し、追肥を側条に行う	
537	野菜	食用ぎく	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
538	野菜	食用ぎく	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
539	野菜	食用ぎく	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
540	野菜	食用ぎく	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
541	野菜	食用ぎく	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	微生物剤等
542	野菜	食用ぎく	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
543	野菜	食用ぎく	a	3	光利用技術(光反射資材)により化学合成農薬を減らす	光反射シート、光反射資材交織ネット等
544	野菜	食用ぎく	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
545	野菜	食用ぎく	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	露地栽培
546	野菜	食用ぎく	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
547	野菜	野菜(全般)	b		自動操舵装置を備えたトラクターの利用により、燃料使用量を削減	「農業機械の省エネ利用マニュアル 平成27年度版」に基づき実践
548	野菜	野菜(全般)	c		収量コンバインと可変施肥農機により化学肥料を削減する	
549	果樹	りんご	a	1	毎春、樹冠下に完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する	
550	果樹	りんご	a	1	牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する	
551	果樹	りんご	a	2	局所施肥を行う	樹冠下施用
552	果樹	りんご	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
553	果樹	りんご	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
554	果樹	りんご	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
555	果樹	りんご	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	BT剤
556	果樹	りんご	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
557	果樹	りんご	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
558	果樹	りんご	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	有袋栽培
559	果樹	りんご	a	3	フェロモン剤を利用し化学合成農薬を減らす	交信攪乱剤
560	果樹	りんご	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	稲わら、剪定枝チップ等
561	果樹	ぶどう	a	1	毎春、樹冠下に完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する	
562	果樹	ぶどう	a	1	牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する	
563	果樹	ぶどう	a	2	局所施肥を行う	樹冠下施用
564	果樹	ぶどう	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
565	果樹	ぶどう	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
566	果樹	ぶどう	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
567	果樹	ぶどう	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	雨よけ栽培、袋かけ、かさかけ
568	果樹	おうとう	a	1	毎春、樹冠下に完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する	
569	果樹	おうとう	a	1	牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する	
570	果樹	おうとう	a	2	局所施肥を行う	樹冠下施用
571	果樹	おうとう	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
572	果樹	おうとう	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
573	果樹	おうとう	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
574	果樹	おうとう	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
575	果樹	おうとう	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	雨よけ栽培
576	果樹	おうとう	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	交信攪乱剤
577	果樹	西洋なし	a	1	毎春、樹冠下に完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する	
578	果樹	西洋なし	a	1	牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する	
579	果樹	西洋なし	a	2	局所施肥を行う	樹冠下施用
580	果樹	西洋なし	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
581	果樹	西洋なし	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
582	果樹	西洋なし	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
583	果樹	西洋なし	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
584	果樹	西洋なし	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	有袋栽培
585	果樹	西洋なし	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	交信攪乱剤
586	果樹	日本なし	a	1	毎春、樹冠下に完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する	
587	果樹	日本なし	a	1	牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する	
588	果樹	日本なし	a	2	局所施肥を行う	樹冠下施用
589	果樹	日本なし	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
590	果樹	日本なし	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
591	果樹	日本なし	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
592	果樹	日本なし	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
593	果樹	日本なし	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	有袋栽培
594	果樹	日本なし	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	交信攪乱剤
595	果樹	もも	a	1	毎春、樹冠下に完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する	
596	果樹	もも	a	1	牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する	
597	果樹	もも	a	2	局所施肥を行う	樹冠下施用
598	果樹	もも	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
599	果樹	もも	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	

	区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
600	果樹	もも	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
601	果樹	もも	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
602	果樹	もも	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	有袋栽培
603	果樹	もも	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	交信攪乱剤
604	果樹	うめ	a	1	毎春、樹冠下に完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する	
605	果樹	うめ	a	1	牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する	
606	果樹	うめ	a	2	局所施肥を行う	樹冠下施用
607	果樹	うめ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
608	果樹	うめ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
609	果樹	うめ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
610	果樹	うめ	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	BT剤
611	果樹	うめ	a	3	天然物質由来農薬を利用し化学合成農薬を減らす	
612	果樹	うめ	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	交信攪乱剤
613	果樹	すもも・ブルーン	a	1	毎春、樹冠下に完熟たい肥10a当たり0.6tを基本として施用する	
614	果樹	すもも・ブルーン	a	1	牧草草生栽培とし、刈り取った草は樹冠下へ敷草する	
615	果樹	すもも・ブルーン	a	2	局所施肥を行う	樹冠下施用
616	果樹	すもも・ブルーン	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
617	果樹	すもも・ブルーン	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
618	果樹	すもも・ブルーン	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
619	果樹	すもも・ブルーン	a	3	生物農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	BT剤
620	果樹	すもも・ブルーン	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
621	果樹	すもも・ブルーン	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	有袋栽培
622	果樹	すもも・ブルーン	a	3	フェロモン剤を利用し、化学合成農薬を減らす	交信攪乱剤
623	果樹	果樹(全般)	a		剪定枝チップを作成し、圃場施用により化学肥料を削減する	剪定枝破砕機
624	果樹	果樹(全般)	f		剪定枝からバイオ炭を作成し、圃場施用により炭素貯留を図る	無煙炭化器
625	果樹	果樹(全般)	f		剪定枝からバイオ炭を作成し、圃場施用により炭素貯留を図る	無煙炭化器
626	花き	キク	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
627	花き	キク	a	2	肥料を畦施用する	
628	花き	キク	a	2	点滴かん水同時施肥を行う	養液土耕
629	花き	キク	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
630	花き	キク	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
631	花き	キク	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
632	花き	キク	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	熱水・蒸気
633	花き	キク	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
634	花き	キク	a	3	光利用技術(UVカットフィルム)により化学合成農薬を減らす	
635	花き	キク	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
636	花き	キク	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	通路マルチ等を含む
637	花き	バラ	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	新植時は別途あり
638	花き	バラ	a	2	肥料を畦施用する	
639	花き	バラ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
640	花き	バラ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
641	花き	バラ	a	3	抵抗性台木を利用し、化学合成農薬を減らす	台木用ノイバラ
642	花き	バラ	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
643	花き	バラ	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	熱水・蒸気
644	花き	バラ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
645	花き	バラ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	敷きわら等
646	花き	トルコギキョウ	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
647	花き	トルコギキョウ	a	2	肥料を畦施用する	
648	花き	トルコギキョウ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
649	花き	トルコギキョウ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
650	花き	トルコギキョウ	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	熱水・蒸気
651	花き	トルコギキョウ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
652	花き	トルコギキョウ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
653	花き	カーネーション	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
654	花き	カーネーション	a	2	肥料を畦施用する	
655	花き	カーネーション	a	2	点滴かん水同時施肥を行う	養液土耕
656	花き	カーネーション	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
657	花き	カーネーション	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
658	花き	カーネーション	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
659	花き	カーネーション	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	熱水・蒸気
660	花き	カーネーション	a	3	光利用技術(シルバーマルチ)により化学合成農薬を減らす	
661	花き	カーネーション	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
662	花き	カーネーション	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
663	花き	宿根カスミソウ	a	1	完熟たい肥10a当たり3tを基本として施用する	
664	花き	宿根カスミソウ	a	2	肥料を畦施用する	
665	花き	宿根カスミソウ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
666	花き	宿根カスミソウ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
667	花き	宿根カスミソウ	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
668	花き	宿根カスミソウ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
669	花き	宿根カスミソウ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
670	花き	ユリ	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	新植時は別途あり
671	花き	ユリ	a	2	肥料を畦施用する	
672	花き	ユリ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
673	花き	ユリ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
674	花き	ユリ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
675	花き	ユリ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	雨よけ栽培
676	花き	ユリ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
677	花き	アルストロメリア	a	1	新植時に深さ50cm程度の中層へ完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用し、深耕する	
678	花き	アルストロメリア	a	2	肥料を畦施用する	
679	花き	アルストロメリア	a	2	肥効調節型肥料を施用する	

	区分	品目	類型1	類型2	実施内容	備考1
680	花き	アルストロメリア	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
681	花き	アルストロメリア	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
682	花き	アルストロメリア	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
683	花き	アルストロメリア	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	敷きわら等
684	花き	デルフィニウム	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	新植時は別途あり
685	花き	デルフィニウム	a	2	肥料を畦施用する	
686	花き	デルフィニウム	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
687	花き	デルフィニウム	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
688	花き	デルフィニウム	a	3	抵抗性品種を利用し、化学合成農薬を減らす	
689	花き	デルフィニウム	a	3	天然物質由来農薬を利用し、化学合成農薬を減らす	
690	花き	デルフィニウム	a	3	熱利用土壌消毒により化学合成農薬を減らす	熱水・蒸気
691	花き	デルフィニウム	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
692	花き	デルフィニウム	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
693	花き	グラジオラス	a	1	完熟たい肥10a当たり3tを基本として施用する	
694	花き	グラジオラス	a	2	肥料を畦施用する	
695	花き	グラジオラス	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
696	花き	グラジオラス	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
697	花き	グラジオラス	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
698	花き	グラジオラス	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
699	花き	グラジオラス	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
700	花き	リンドウ	a	1	完熟たい肥10a当たり2tを基本として施用する	
701	花き	リンドウ	a	2	肥料を畦施用する	
702	花き	リンドウ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
703	花き	リンドウ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
704	花き	リンドウ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
705	花き	リンドウ	a	3	機械除草により化学合成農薬を減らす	
706	花き	リンドウ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	敷きわら等
707	花き	スターチス	a	1	完熟たい肥10a当たり3tを基本として施用する	
708	花き	スターチス	a	2	肥料を畦施用する	
709	花き	スターチス	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
710	花き	スターチス	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
711	花き	スターチス	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
712	花き	スターチス	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
713	花き	スターチス	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
714	花き	カンパニュラ	a	1	完熟たい肥10a当たり3tを基本として施用する	新植時は別途あり
715	花き	カンパニュラ	a	2	肥料を畦施用する	
716	花き	カンパニュラ	a	2	肥効調節型肥料を施用する	
717	花き	カンパニュラ	a	2	施用する窒素成分量のうち3割以上を有機質由来の肥料とする	
718	花き	カンパニュラ	a	2	完熟たい肥施用により化学肥料を削減する	
719	花き	カンパニュラ	a	3	被覆栽培により化学合成農薬を減らす	ハウス栽培での防虫網等
720	花き	カンパニュラ	a	3	マルチ栽培により化学合成農薬を減らす	
721	花き	花き(全般)	b		ヒートポンプや木質バイオマス暖房機の導入等による再生可能エネルギーを利用する	ハウス栽培等
722	花き	花き(全般)	b		内張、外張の多層化や、保温性の高い被覆資材の利用によりエネルギー使用量を削減する	ハウス栽培等
723	花き	花き(全般)	b		温度ムラの改善や変温管理の実施など、作物の局所加温技術を導入する	ハウス栽培等
724	花き	花き(全般)	b		自動操舵装置を備えたトラクターの利用により、燃料使用量を削減	「農業機械の省エネルギーマニュアル 平成27年度版」に基づき実践
725	花き	花き(全般)	c		収量コンバインと可変施肥農機により化学肥料を削減する	
726	畜産	飼料用とうもろこし	a	2	たいきゅう肥の施用等により化学肥料を減らす	別表
727	畜産	飼料用とうもろこし	a	3	化学合成農薬の使用量を2回以下に減らす	
728	畜産	牧草	a	2	たいきゅう肥の施用等により化学肥料を減らす	別表
729	畜産	牛	b		放牧を行う	
730	畜産	たい肥	b		攪拌機やエアレーション等によりたい肥の好気性強制発酵に取り組む	
731	畜産	飼料	e		食品製造における副産物を活用した国産飼料を給与する	
732	畜産	飼料	b		アミノ酸バランス改善飼料を給与する	
733	畜産	飼料	b		不耕起栽培を行う	
734	水産	漁船等	b		省エネルギー型の機器・設備を導入する	競争力強化型機器等導入対策事業機器導入指針の対象機器・設備とする
735	水産	養殖業	e		残餌の流出を抑制する給餌方法に取り組む	
736	林業	丸太	b		省エネ型高性能林業機械を導入する	素材生産量当たりの燃油使用量の削減
737	林業	特用林産物	b		省エネルギー型特用林産物生産施設を導入する	従来の施設より、燃油使用量15%以上縮小、又は、エネルギー効率15%以上向上

共通 上記記載に当てはまらない取組についても具体的に効果等を記載することで認定が可能です。

(例)省エネルギー型の機器・設備を導入する(現状10L/hr 8L/hr)

(別表)

1 飼料用とうもろこし

土壌窒素 (乾土100g中)	分析値がない場合の目安	窒素施肥量 (10a当たり)
10mg未満	作付け1～2年目	10.5kg以下
10～13mg	作付け2～3年目	7.0kg以下
13mg以上	作付け4年目以降	3.5kg以下

2 ソルガム

土壌窒素 (乾土100g中)	分析値がない場合の目安	窒素施肥量 (10a当たり)
10mg未満	作付け1～2年目	10.5kg以下
10～13mg	作付け2～3年目	7.0kg以下
13mg以上	作付け4年目以降	3.5kg以下

3 イネ科単播及び混播草地

区分	目標収量 (10a当たり)	窒素施肥量 (10a当たり)
オーチャード グラス	5t	10.5kg以下
	6t	14.0kg以下
	7t	17.5kg以下
	8t	21.0kg以下
チモシー	4～5t	7.0kg以下
	6t	11.2kg以下

4 アルファルファ混播草地

年次区分	施肥時期	窒素施肥量 (10a当たり)
利用1年目	早春	3.5kg以下
	1番草後	2.1kg以下
	2番草後	2.1kg以下
2年目以降	早春	0kg
	1番草後	0kg
	2番草後	2.1kg以下